

『ムスクの甘い誘惑』

著：高塔望生

ill：香坂あきほ

泥(でい)酔(すい)状態の埴生は、タクシーが走り出した途端、ぐっすり眠り込んでしまった。

それを懸(けん)命(めい)に起こして、中目黒駅から埴生の住むマンションまでの道を訊き出すのは容(よう)易(い)ではなかった。

おかげで、普通なら赤坂から車で十分足らずのはずが、二十分近くかかってしまった。

やっとの思いで辿(たど)り着いた埴生の住まいは、中目黒の駅に近い閑(かん)静(せい)な住宅街の一角にあった。

高層マンションは好きではないと、汐留のタワーマンションを断ったというだけあって、高級感のある四階建て低層マンションである。

「大丈夫ですか？ 足下、気をつけて……」

運転手に待っていてくれるように頼むと、奥寺はうっかりすると座り込んでしまいそうな埴生を抱えるようにしてマンションのエントランスへ向かった。

店を出る時はマンションまで送り届ければ良いと思い、軽い気持ちで引き受けたのだが、この様子ではちゃんと部屋まで連れていかないとダメらしい。

やれやれとため息をついて歩いていくと、入り口はオートロックになっている。

「埴生さん。鍵(かぎ)、貸してください」

耳元で奥寺が呼びかけると、埴生はぼんやりとした顔を向けた。

「鍵です、鍵……」

もう一度繰り返すと、ようやく通じたらしく、埴生はスーツのポケットを探っている。

渡されたカードキーでオートロックを解除すると、奥寺はマンションの中へ入った。

深夜のマンションは既に寝静まって、奥寺と埴生の靴(くつ)音だけが響いている。

「部屋は何階ですか？」

エレベーターホールで訊くと、辛(かろ)うじて「三〇五」と眠そうな声が返ってきてホッとした。

三〇五号室は、マンションの東側の角部屋だった。

玄関を開けて中へ入ると、埴生は上がり框(がまち)に崩れ落ちるように座り込んでしまった。

立ち上がる気配のない埴生から靴を脱がせると、奥寺は「埴生さん。ちょっとおじゃまします」と断ってから埴生を抱えて部屋の中へ上がった。

開け放したままになっていたドアから覗(のぞ)くと、そこはリビングだった。

二十畳ほどはあろうかと思う広々としたフローリングには、チャコールグレイのラグが敷(し)かれ、サンドベージュのソファとガラステーブルが置いてある。

壁際のサイドボードの上には、大画面の薄型テレビが据(す)えられていた。

取り敢えずリビングへ埴生を連れて入ると、奥寺はソファへ座らせた。

ふうっと息をついて振り向くと、部屋の奥にカウンター式のキッチンがある。

ステンレス製の水切りカゴに伏せてあったグラスに水を汲(く)み、奥寺は埴生のところへ戻った。

「埴生さん、水飲みますか？」

ぐったりしている埴生を抱き起こし、口許にグラスを差しつけると、埴生は小さな子供のように素直に水を飲んでいる。

埴生をこのままにして帰ったら、朝までここで寝込んでしまうかもしれないと奥寺は思った。

三月半ば近いとはいえ、明け方はまだかなり冷え込むこともある。

風邪をひいたら気の毒だと思い、奥寺はグラスをテーブルに置くと玄関ホールへ引き返した。

リビングを出て正面のドアを開けると、そこはトイレだった。

「っと、違ったか……」

眩(つぶや)いて、右側にあったもう一つのドアを開けると、八畳あまりの寝室になっていた。

どうやら、1LDKのマンションらしい。

部屋の中央に置かれたダブルベッドには、オリーブグリーンのベッドカバーがきちんと掛けられている。

案外、埴生は几(き)帳(ちょう)面(めん)な性格らしいと、奥寺は感心してしまった。

ベッドカバーを捲(めく)って埴生を寝かせられるようにしてから、奥寺はリビングへ取って返した。

埴生は奥寺が座らせたままの姿勢で、眠り込んでいた。

「埴生さん、起きてください」

声をかけると微かにうなづくものの、埴生が立ち上がろうとする気配はない。

ほとんど正体不明の泥酔状態である。

「まったく、誰だよ、こんなに飲ませたのは……。この間、ふたりで飲んだ時は、そんなに弱そうには見えなかったんだけどなあ」

うんざりとはぼやきながら、奥寺は埴生を半ば引きずるようにして寝室へ連れていった。

細身とはいえ、大の男をひとり支えて歩かせるのはけっこうな力がある。

ベッドへ倒れ込んだ埴生から、奥寺はまずスーツの上着を脱がせた。

それから、襟(えり)元(もと)を飾っているシルバーのカラーピンを外し、ネクタイを引き抜く。

きっちりと埴(は)められたシャツの第二ボタンまで外し、襟元をくつろげてやると、埴生は目を閉じたままふうっと深い息をついた。

開いた襟元から、浮き上がった鎖(さ)骨(こつ)が覗いていた。

その窪(くぼ)みに薄い影ができている様子が、男とは思えないほど色っぽくて、奥寺は一瞬ドキリとしてしまった。

思わず手を止めて見つめた奥寺の鼻先を、甘いムスクの香りが仄かに掠(かす)めた。

ハッとして身を起こすと、奥寺はスラックスのベルトも緩(ゆる)めてやろうと手をかけた。

途端、埴生が小さな声をあげて身じろぎ、奥寺はドギマギと手を離れた。

何をそんなに慌(わ)てているんだ、俺は——。

自分で自分に苦笑しながら、奥寺が毛布を掛けてやろうとした時、不意に埴生がばかりと目を開けて奥寺を見た。

天井のライトを映した埴生の双眸は、酔いに潤んでいるせいなのか、ゾクリとするような色気を湛(たた)えていて奥寺をドキリとさせた。

とろりと焦(しょう)点(てん)を失っているようであり、その実、じっと奥寺を見つめているようにも感じる。

心許なげなのに、一方でひどく切(せつ)羽(ば)詰(つ)まった深い色が眸(ひとみ)の底に揺らめいている気もした。

「…えっと……。埴生さん、わたしはこれで失礼しますから」

ドギマギと口ごもりながら奥寺が挨拶すると、埴生は顔をしかめて何か言いたそうにした。

「えっ？ なんですか？」

気分でも悪いのかと思い、奥寺が耳を近づけた瞬間、突然、視界がぐるりと回転した。

「うわっ！」と思わず叫んだ唇(くちびる)に、唇が重なった。

何が起きたのか理解できないまま、奥寺は進入してきた熱い舌にきつく絡め取られていた。

パニック状態で愕(がく)然(ぜん)と目を見開いたまま、奥寺は自分にのしかかっている埴生を見た。

細身の身体はどこにこんな力があるのかと思うほどの力で、埴生は奥寺を組み敷いている。

埴生の脚(あし)が奥寺の両脚の間にこじ入れられると、奥寺は恐(きょう)慌(こう)状態に陥(おちい)っていた。

「う——っ！」

くぐもった叫び声をあげ、奥寺は力いっぱい埴生を押し退け、突き飛ばした。

「何をすするっ！」

慌てて起き上がり怒鳴りつけたが、俯せになった埴生の返事はない。

「埴生さんっ！ どういうつもりです!？」

狼(ろう)狽(ばい)と怒りにふるえながら、奥寺はもう一度怒(ど)鳴(な)ったが、やはり返事はなかった。

まさか、打ち所が悪かったなんて言わないだろうな——。

途端に不安に駆(か)られ、恐る恐る覗き込むと、埴生は既にぐっすりと眠り込んでいた。

一気に脱力してしまい、奥寺は混乱した気持ちのまま惘(ぼう)然(ぜん)と天を仰(あ)おいだ。

なんだってこんなことになったのか、わけが分からない。

よもや奥寺を女性と間違えたということはないだろうが——。

そっと足音を立てないように後(あと)退(ずさ)ると、奥寺は半ば逃げるように寢室を出た。

口(こう)腔(くう)には、まだ埴生の舌にまさぐられた時の感触が残っている。

思わず手の甲で口許を拭(ぬぐ)ってから、奥寺は沁(しみ)み入るようなため息をついた。

「…なんだったんだ、あれは……」

廊下に立ち尽くしたままぼんやりと呟いた時、タクシーを待たせたままだったことを思い出し、奥寺は慌てて埴生の部屋を飛び出していた。

本文 p42～6c より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>